





Heritage of Jazz by DIGITAL PABLO 40 39

# "PASSION FLOWER" ZOOT SIMS PLAYS DUKE ELLINGTON

パッション・フラワー～ズート・シムズ・プレイズ・デューク・エリントン

VICJ-60879  
STEREO



1. スイングしなげや意味ないね (IF IT AIN'T GOT THAT SWING) (Ellington - Mills) 5:03
2. イン・ア・ミロウ・トゥン IN A MEADOW TUNE (Ellington - Gobbler) 4:29
3. アイ・ガット・イット・バッド I GOT IT BAD AND THAT AIN'T GOOD 4:50 (Ellington - Walker)
4. 歌を忘れて LET A SONG GO OUT OF MY HEART 3:02 (Ellington - Nemo - Mills - Redmond)
5. ブラック・バタフライ BLACK BUTTERFLY (Ellington - Mills) 3:54
6. ドゥ・ナッシング・ヒア・トゥ・ユー DO NOTHING TILL YOU HEAR FROM ME 6:47 (Ellington Russell)
7. ユア・ラブ・ハズ・フェイド YOUR LOVE HAS FADED (Ellington - Strayhorn) 4:46
8. ボーン・オブ・ジョイ BOJANGLES (Duke Ellington) 4:48
9. パッション・フラワー PASSION FLOWER (Billy Strayhorn) 4:12

- ストームズ (6)
- ニュー・オーケストラ (cond. arr.) ■ ボビー・ブライアント (tp)
- アル・アール・ロビンソン (tr) ■ ジョージ・シュンジャー (tr)
- アル・カウダー (tr) ■ ジョージ・シュンジャー (tr)
- フランク・ロビンソン (tr) ■ ジョージ・シュンジャー (tr)
- ニュー・オーケストラ ■ ニュー・オーケストラ (sa)
- フランク・ロビンソン (sa) ■ ジョージ・シュンジャー (sa)
- パット・ロビンソン (sa) ■ ジョージ・シュンジャー (sa) ■ ストームズ (sa)
- アラン・ロビンソン (sa) ■ ジョージ・シュンジャー (sa)

- ストームズ (sa)
- ニュー・オーケストラ (sa)
- ジョージ・シュンジャー (sa)
- ストームズ (sa)
- ニュー・オーケストラ (sa)
- ジョージ・シュンジャー (sa)
- ストームズ (sa)
- ニュー・オーケストラ (sa)
- ジョージ・シュンジャー (sa)

- ストームズ (sa)
- ニュー・オーケストラ (sa)
- ジョージ・シュンジャー (sa)
- ストームズ (sa)
- ニュー・オーケストラ (sa)
- ジョージ・シュンジャー (sa)
- ストームズ (sa)
- ニュー・オーケストラ (sa)
- ジョージ・シュンジャー (sa)

© 1994 MCA Records, Inc. All Rights Reserved.  
 Zoot Sims (tr), Benny Carter (cond. arr.), Bobby Bryant (tr), Al Aronson (tr), Oscar Peterson (tr), Earl Gardner (tr), Duke Ellington (tr), Hank Westbrook (tr), Gene Mitchell (tr), Benny Powell (tr), Max Roach (tr), Frank Wess (tr), Pat Metheny (tr), Randy Gabeles (tr), John Coltrane (tr), Jimmy Heath (tr), Arno Strecker (tr), Cindy Tate (tr)

Recorded May 15, 1960  
 Original recording engineered by Bob Shapiro  
 (MCA Recording Studio, New York City)

DO NOTHING TILL YOU HEAR FROM ME / YOUR LOVE HAS FADED / BOJANGLES  
 Zoot Sims (tr), Jimmy Rowles (tr), Duke Ellington (tr), John Coltrane (tr), Arno Strecker (tr), Cindy Tate (tr)

PASSION FLOWER  
 Zoot Sims (tr), Jimmy Rowles (tr), Michael Moore (tr), John Cole (tr)

Recorded August 14, December 6 and 11, 1970  
 Original recording engineered by Dennis Smith  
 (Gulfstream Studio, Hollywood, CA)

Original recording produced by Norman Granz  
 Original recording engineered by Dennis Smith  
 (Gulfstream Studio, Hollywood, CA)

Cover photo by Phil Stern  
 Cover design and layout by Norman Granz and Sharon Meigs  
 (MCA Recording Studio, New York City)

This album is remastered using 20Bit K2™ at JVC studios with  
 DIGITAL IC technology.  
 Mastering engineer: Tamara Beck for **FLAIR** at JVC Studios

**NOTE INFORMATION:**  
 This recording is taken from the original analog 1970-'80's source material and therefore contains inherent tape flaws, such as hiss, distortion, and analog dropouts.  
 These tape flaws became more evident on low level passages and on most fills.

このCDを制作するにあたっては、20bit K2™バーコードインジックを用いてCD化されました。

また、このCDに収録の、80年代前半のライブ・セッションが数曲収録されており、その中には、デューク・エリントンが生前に録音された「パッション・フラワー」のオリジナル・バージョンも収録されています。



ズート・シムズはなんとも言えぬ魅力がある。同じウォリアー・ブラス出身のスタン・ゲッツと比べると、その魅力は好対照だ。牙気あふれるゲッツの演奏に対し、ズートのほうははたかなで洋装として、捉えどころがない。華麗なゲッツに対して、どくどくいずべたような言ひ方もできるし、そのどくどくいずべたような言ひ方も魅力なのだ。ゲッツは70年代から80年代にかけてか言われるように、時期によってサウンドの違いがあった。一方ズートは基本的に1950年代から比べると80年代まで、まったくと言っていいほどスタイルや音を変えなかった。時代感に敏感でない言ひ方であるだろうし、頑なに自分のスタイルを守り通した一途な人という見方もできる。どう受け止めるかは各人の勝手だが、とにかくズートは抜群のタイム感の持ち主であり、そこそこ専らする他様なスイング感が最高。そして、よくよくなると、その結果、ズートの演奏から漂ってくる一種独特のムードは、別に革新的なつもりでもないが、正直に共感できる種類のものだ。だから、私はズートが好きだ。

ズートに関しては、これまでにいろんな人がその魅力について言及しているが、ぜひ付け加えたのが彼のユーモアセンス、ユーモアのセンスがジャズとどうい関係があるんだなんて野暮な反論はない。そして言ってもいいが人間が演奏するのって、音楽には人間性が反映されるのだ。そこがコンピュータ・ミュージックとの決定的な違い。ズートの茫洋とした演奏は、その人柄と無関係なんてこととはありえないのだ。

なんだけか、そうじゃユーモアだ。1943年、17歳のズートは、あるジャズバンドのメンバーだった。あるローディングの時、スタジオに1個のリンゴを持参してバンドスタンドのところに置いた。演奏がはじまり、ズートがリンゴを取りかじりながらバンドマンが近づいてきて、そのリンゴを取り上げ、おむろに食べはじめた。そしてバンドマンはズートもってリンゴを続けるより、目で合図を送った。もつと食べ、もつととやっていたうちに、バンドマンがリンゴを食べて終わってしまった。バンドマンがリンゴ大好き人間だったかどうかは知らないけれど、ともかくズートはリンゴ好きの効果によって、それまでバンドで与えられたことのないリンゴの味を口の中に成熟した。これってユーモアのセンスだね。

ズート・シムズは本名をジーン・ヘイリー・シムズという。それがなんでズートになったか。なんでも10代の頃、ロサンゼルスでテン・ペイカーのワン

ディという時代、ペイカーからその名を付けられたという。ズート"という言葉は「いまはアメリカでも死語にならなくて、わざわざキープ・キープ・キープのオチがオチの旗手なスーパーストーンズ」とズート・シムズがふざけか言っているが、有名なオマール・シュルツマンの証言によれば、元々は「キートン」という言葉のニュー・オーケストラだったらしい。だから「ズート」になると、それはスタン・ゲッツとかフランク・ジョニー・ヘンリーとかフランク・シムズだが、ケン・ペイカーがバンドスタンドの正面に、いろんなニックネームを書いて貼ったところ、ジーン・ヘイリー・シムズは「ズート」と書かれたバンドスタンドの後ろに立った。もちろん本人はバンドスタンドの後ろに位置するから、そこにならなくて書いてあるのを知る由もない。どうやら、お世辞にもキートンとは言えないヤクザ奏者とその言葉の組み合わせがおかしかったようで、以後、彼はズートと呼ばれるようになった。ニックネームの由来は実に他愛ないが、これもセンス・オブ・ユーモアの一例であろう。

ズートに関するエピソードは、後と親しかたページに、ビル・クロウの回想記とよらバンドランド(新編)にも見出す場所する。なかでもスタン・ゲッツに関するズートの次のワン・プレイズは、ユーモアであり、また真実を言っている。ビル・クロウによれば、スタン・ゲッツという人は「素面では兵衛の良男だが、いったんクリアが入るとある場合にはメロノ感情的になったり、かと思つた瞬間には冷たくて、犀利透徹な人間になってしまつた」のだそうだ。で、仲間とバードで話している時、「スタンというのはまったく感のいい人なんだ」とズートが言ったのだ。だから、人ではない、人たまたま覆ぎ形になっているところに要注意。原文ではこうなっている。「Stan gets in a nice bunch of guys」、つまりこの想い一言で、ゲッツの複雑な性格を見事に言い表しているわけだ。

オスカー・ピーターソンがカナダのテレビ番組でホスト役をやっていた時代のエピソードも面白い。ズートがゲスト出演した時、ピーターソンが「将来あなたの楽器はどういふうになっていくだろう、どうなつてほしいか」と尋ねた。その時ズートがどう答えたかという、じつと楽器を見つめたか、「ラッカーを直すことになるだろう」と言ったのだ。うーん、これはと思わず笑ってしまう。この種のエピソードはまだ沢山ある。もう一度言おう、ズート・シムズはユーモア

の人ののである。直接音楽と関係ないことばかり書いてしまったが、たまにはこういうのもいいだろう。とは言っても本作のことに触れたい使役も来たしたことになるので、ここではアルバムの話に切り換える。

ズートは1970〜80年代にパブロに数多くのリーダー作を録音した。大半はコンボイでも録音したが、70〜80年に録音した本作は、9曲中5曲がペニー・オクター・編曲・指揮のオーケストラとの共演という点がユニークだ。そしてエリントン・サンバーはとりわけ取り上げられている。これは本作の一大特徴だ。ズート・ペニー・オクターはパブロから出ている75年と77年のモントルー・ジャズ・フェスティバルのジャズ・マスターズも共演していた。もちろんそれ以外にも何度か録音を合わせており、お互い手の内はずっと熟知している間柄。ジャズ界の人間関係はペニー・オクター・アラン・テイラー、ジーン・ジョーンズ、フランク・ウォレス、マイケル・ロイといった名手たちと名を連ね、曲は不滅のジャズ・ストリート・サンバーとロを収めるのがズート・シムズは、すべて役者揃ったわけだ。あととゆつたりとした気分であまりを褒めたいのだ。

「スイングしなげや意味ないね」ではズートのほか、ジョー・ウォルツの「イン・ア・ファンク・オブ・ウェスト」のフル・バンドも聴こえる。1940年以降エリントン楽団の主要なメンバーとなった「イン・ア・メロウ・トゥン」はパット・メセニーの十八番だったが、この頃のズートのソロにはどんな色も感じられる。「アイ・ガット・イット・バッド」のズートはチャー・リットと、アル・クリンゲンのような感懐の音で夢を綴っているのが印象的だ。「歌を忘れて」は愛らしい演奏で、ペニー・オクターのアレンジもすばらしい。『ブラック・バタフライ』はジョー・ホッジズをフィーチャーした演奏が有名で、ズートも意識したのか、ホッジズの的を披露している。これ以降の4曲、「ドゥ・ナッシング・ヒア・ユー・ヒア・ミー」、「ユア・ラブ・ハズ・フェイド」、「ボーン・オブ・ジョイ」、「パッション・フラワー」はピアノ・リサイタルに似たノン・バンド演奏。これはズート得意のフォーマットなので、さらに余す所のないソロを繰り広げている。

Dec. 2001 [再刊正] Shoji Ichikawa のワン

**PABLO**



**"Passion Flower"  
Zoot Sims Plays Duke Ellington**

VICJ-41793

COMPACT  
**disc**  
DIGITAL AUDIO

STEREO / JASRAC

1. It Don't Mean a Thing (If It Ain't Got That Swing)
2. In a Mellow Tone
3. I Got It Bad and That Ain't Good
4. I Let a Song Go out of My Heart
5. Black Butterfly
6. Do Nothing Till You Hear from Me
7. Your Love Has Faded
8. Bojangles
9. Passion Flower

From a Master Recording Owned by Fantasy, Inc., U.S.A. All Rights of the Manufacturer and of the Owner of the Record are Reserved. No Part of This Record may be Reproduced, Distributed, Performed, Broadcasted, Recorded, or Copied in any Manner without the Written Permission of Fantasy, Inc., U.S.A. All Rights Reserved. © 1987 Fantasy, Inc., U.S.A. All Rights Reserved. Making This Record Prohibited by Law.

